

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：12613

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12227

研究課題名（和文）美術制度から見たナビ派の受容と現在

研究課題名（英文）The Actual Reception of Nabis From the Viewpoint of the Art System

研究代表者

小泉 順也（KOIZUMI, Masaya）

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：50613858

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近年のフランス美術史において再評価が進むナビ派を取り上げ、美術館における作品収蔵の歴史、展覧会や回顧展の分析を通して、この美術運動の現在に繋がる受容の実態の一端を明らかにした。調査研究の成果は、パリのオルセー美術館におけるナビ派のコレクションの定量的分析、日本の美術館で開催された2つのピエール・ボナール展の比較検証、ポール・セリュジエ《タリスマン（護符）》をめぐる逸話の再考をそれぞれ論じた計3本の論文に発表した。さらに、8回の研究発表と2回の招待講演を実施し、フランスと日本の美術館に所蔵されたコレクションに関する新たな研究の方向性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、美術館の作品収蔵の歴史ならびに展覧会や回顧展の調査を通して、フランス近代美術史におけるナビ派の評価や受容の歴史の変遷を明らかにした。あわせて、日本各地の美術館に所蔵されたナビ派のコレクション、関連する展覧会を調査することで、再評価の機運が高まるナビ派の動向に日本が果たした学術的貢献を指摘した。また、シンポジウムおよびワークショップの開催、研究科の紀要雑誌の特集企画「ナビ派の現在」などを通して、ナビ派を研究する各地の美術館の学芸員、大学の研究者や大学院生を緩やかに繋ぐネットワークを構築した。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on the Nabis who have recently been re-evaluated in French art history, and partly reveals the actual reception of the art movement through the history of art collections and the analysis of exhibitions and retrospectives. The survey results have been published in the three articles dealing with the quantitative analysis of the Nabis collection of the Orsay Museum, the comparison of two exhibitions of Pierre Bonnard in Japanese museums, and the study of anecdotes about Paul Serusier's "Talisman". The ten presentations, including two invited lectures, show new directions for research on the collections of French and Japanese art museums.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ナビ派 美術制度 受容研究 コレクション 美術館 フランス近代美術

1. 研究開始当初の背景

フランス近代美術史におけるナビ派の位置付けは、20世紀半ばから集団的な美術動向としての評価が高まり、1980年代以降の美術行政の枠組のなかで一定の地位が与えられ、最終的に革新的な装飾芸術運動として歴史のなかに組み込まれた。ナビ派には複数の芸術家が複雑に関わり、美術運動として規定しようとするといくらか困難が生じる。また、長年にわたり重要な作品が遺族や個人コレクターの手元に所蔵された状況が続き、作品や資料の調査が進まない場面があった。しかし、近年このような状況に変化の兆しが表れている。以上の背景を踏まえて、本研究は以下の4つの視点を総合するかたちで着想された。

(1) フランスの美術館におけるコレクションの形成過程を把握することは、芸術家受容を理解する鍵となる。購入、寄贈、遺贈等の手段を含めて、すべての美術作品の収蔵の背景には何らかの事情が介在している。コレクションの定量的な調査分析を行い、時系列に沿った評価の確認が必要となる。

(2) 作品収蔵に関与した学芸員や館長等の役割についても、一定の調査が求められる。フランスの美術館においては、作品収蔵に関わる一次資料が議事録や証言のかたちで残されているケースがある。これらの資料を通して、結果的に当時の美術制度の実態が浮き彫りになる。

(3) 大規模な回顧展や展覧会が開催された際の同時代批評も重要な手掛かりとなる。新聞雑誌の美術批評の調査を通して、当時の反応を掘り起こす作業は欠かせない。

(4) 日本におけるコレクション形成も本研究の調査の対象に含まれる。日本の美術館にはナビ派のコレクションが各地に収蔵されている。フランスにおける調査と並行して、日本のコレクターや美術館の活動がナビ派受容に与えた影響を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究は、美術制度の観点からナビ派の評価の変遷と受容の実態を、アクチュアルな視点で検証することを主眼とする。具体的には、美術館を舞台にした作品収蔵と展覧会の開催を調査対象に定め、関連する遺族やコレクター、美術館の学芸員や館長、美術批評家などの関与や影響を、各種の資料に基づいて実証的に解明することを目的とする。美術館は作品を後世に継承する場であると同時に、芸術家と作品を時間をかけて選別する「ふるい」の役割を果たしている。このような問題意識に基づき、本研究ではナビ派を中心に、美術館を軸とする美術制度の機能を検証する。また、明治時代以降、日本は長い時間をかけてフランス近代美術に親しむ素地を作り上げてきた。日本各地に所蔵されたナビ派作品、関連する展覧会も調査対象に含め、現在に繋がるナビ派の評価に日本のコレクターや美術館が与えた影響を解明する。

3. 研究の方法

フランスの美術館のコレクション調査は、各館で発行された所蔵品目録による調査に加えて、近年はオンラインで整備されたデータベースを参照することが一般的な手法となっている。様々な事情からすべての情報は公開されず、データベースが未整備の館も存在するが、紙媒体とオンラインの両者を総合的に調査してデータを抽出した。さらに作品や収蔵に関わる資料の調査をパリのフランス国立図書館、オルセー美術館図書室および資料室、国立公文書館等において実施した。あわせて、関連展覧会の同時代批評を新聞雑誌等で調査し、ナビ派の歴史的な評価の変遷を辿った。ただし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で十分な現地調査を実施できなかったが、可能な範囲で本研究に関わる資料を参照した。また、ナビ派作品を所蔵する日本の美術館でも作品および資料調査を実施し、ナビ派受容において日本のコレクターや美術館が果たした貢献を考察した。

4. 研究成果

(1) 計画の初年度にあたる2018年度はパリで資料調査を行った後、アラブ首長国連邦のルーヴル・アブダビで開催されたナビ派に関連する展覧会「日本の親和性：近代の装飾に向かって」を見学した。国内では新潟県立近代美術館でナビ派の所蔵作品を調査した。研究成果の発表としては、①「オルセー美術館におけるナビ派のコレクション：作品の収蔵数の変遷と最近の動向」と題した論文を『言語社会』に発表し、その時点で約500点（素描や写真を除く）を数えるナビ派作品を所蔵するオルセー美術館のコレクション形成の変遷を確認した。研究発表としては、②東京大学で開催された国際ワークショップ「La formation et la diffusion des collections d'art francais dans les espaces globaux, 1870-1950」において、「La reconnaissance de Paul Gauguin au Japon a travers les collections（コレクションを通じた日本におけるポール・ゴーガンの評価）」と題したフランス語の招待講演、③日仏美術学会が主催するセミナー「ピエール・ボナールの多面性」において、「La reception de Pierre Bonnard dans les musées francais et japonais（フランスと日本の美術館におけるピエール・ボナールの受容）」

と題したフランス語の研究発表を行った。

(2) 計画の2年目にあたる2019年度は、作品調査および資料調査のためにロンドン、アムステルダム、パリに滞在し、関連する展覧会を見学した。研究成果の発表としては、①日仏美術学会が主催するシンポジウム「ナビ派の現在」において、2018年に訪問したルーヴル・アブダビとナビ派の関係性を論じた招待講演を行い、②一橋大学博物館研究会が主催するワークショップ「ナビ派の2019年」において、ポール・セリュジエの代表作《タリスマン(護符)》に関する研究発表を行った。

(3) 計画の3年目にあたる2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、国内外の現地調査ができない状況が続いた。その中で、①『現代フランス哲学入門』(ミネルヴァ書房、2020年)に収められた項目「ポール・ゴーガン」の執筆を担当し、その創造活動を哲学思想の文脈に位置付ける試みを行うとともに、②2019年に実施したシンポジウム「ナビ派の現在」の報告を『日仏美術学会会報』39号に発表した。

(4) 計画の4年目にあたる2021年度は、久しぶりの作品調査を静岡県の上原美術館で実施したが、一方で依然として海外への渡航は実現しなかった。研究成果の発表としては、①『言語社会』16号に5本の論考から成る特集「ナビ派研究の現在：近年の展覧会をめぐる考察」を企画し、②2010年代以降の研究動向をまとめた序文、③ポール・セリュジエの《タリスマン(護符)》をオルセー美術館で開催された展覧会に関連付けて考察した論説を同誌に発表した。また、2020年度から延期されていた学術イベントがオンライン形式で開催されるようになり、④フランス文化省等が主催する「第10回美術史フェスティバル Festival de l'histoire de l'art」(国際会議)のテーブルロンド「日本におけるフランス絵画」での研究発表、⑤日仏美術学会および京都工芸繊維大学大学院デザイン・建築学系造形史研究室主催のシンポジウム「ポスト印象派から後世代に継承されたユートピアの表象 L'heritage utopique de Cezanne, van Gogh et Gauguin a Signac, et a Matisse」(国際会議)での研究発表、⑥日仏美術学会創立40周年記念シンポジウム「フランス美術研究の現在と未来 Present et futur des etudes sur l'art francais - Vers le developpement des echanges academiques franco-japonais」(国際会議)での研究発表を行った。なお、⑥についてはシンポジウムの実行委員として企画準備を担当した。あわせて、⑦日仏美術学会第160回例会「親密さをめぐる諸問題」でコメンテーターを務め、⑧一橋大学言語社会研究科主催のシンポジウム「日本の美術館とナビ派：地方美術館から考える研究の可能性」をオンラインで開催し、日本の美術館が所蔵するナビ派作品に関する研究発表を行った。なお、⑧のシンポジウムの様子を伝える関連記事が静岡新聞夕刊に掲載された。

(5) 計画を1年間延長した5年目にあたる2022年度は、パリで3年ぶりの資料調査を実施し、オルセー美術館において新収蔵作品の作品調査を行った。研究成果としては、①東京大学で開催されたシンポジウム「芸術作品の流通と美術コレクション形成：通時的/共時的分析とデータベース」Symposium international « Circulation des oeuvres d'art et formation des collections d'art: analyse synchronique/diachronique et base de donnees」(国際会議)において研究発表を行い、日本の美術館が所蔵するフランス美術コレクションに関する新たな研究の道筋を示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小泉順也	4. 巻 16
2. 論文標題 ポール・セリュジエ《タリスマン（護符）》をめぐる逸話の再検証：オルセー美術館の展覧会を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/73476	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小泉順也	4. 巻 16
2. 論文標題 ナビ派研究の現在：近年の展覧会をめぐる考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語社会	6. 最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/73475	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小泉順也	4. 巻 39
2. 論文標題 シンポジウム「ナビ派の現在 - 近年の展覧会と研究動向の回顧」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日仏美術学会会報	6. 最初と最後の頁 71-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小泉順也	4. 巻 14
2. 論文標題 ピエール・ボナールの受容をめぐる一考察：日本で開催された展覧会の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文・自然研究	6. 最初と最後の頁 48-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31083	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小泉順也	4. 巻 13
2. 論文標題 オルセー美術館におけるナビ派のコレクション：作品の収蔵数の変遷と最近の動向	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文・自然研究	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/30149	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 日本の美術館におけるフランス美術コレクション
3. 学会等名 国際シンポジウム「芸術作品の流通と美術コレクション形成：通時的 / 共時的分析とデータベース」（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 日本の美術館におけるフランス美術コレクション
3. 学会等名 「芸術作品の流通と美術コレクション形成 - 通時的 / 共時的分析とデータベース」（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 日本の美術館におけるポール・ゴーガンとナビ派の受容
3. 学会等名 Festival de l'histoire de l'art（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 ポール・ゴーガンとブルターニュ - もうひとつの楽園を求めて
3. 学会等名 OPEN TECHシンポジウム「ポスト印象派から後世に継承されたユートピアの表象」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 日本の地方美術館の潜在的可能性 - ナビ派の収蔵情報を通じた考察
3. 学会等名 一橋大学言語社会研究科主催シンポジウム「日本の美術館とナビ派 - 地方美術館から考える研究の可能性」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 日本の美術館におけるフランス美術コレクションとその歴史：アカデミズム絵画からナビ派まで
3. 学会等名 日仏美術学会創立40周年記念シンポジウム「フランス美術研究の現在と未来」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 第160回例会「親密さをめぐる諸問題」のコメントーター
3. 学会等名 日仏美術学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 ルーヴル・アブダビにおける「ナビ派」：開館の経緯と展覧会の開催をめぐって
3. 学会等名 日仏美術学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小泉順也
2. 発表標題 20世紀のポール・セリュジエ：《タリスマン（護符）》をめぐる逸話の再検証
3. 学会等名 一橋大学博物館研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaya KOIZUMI
2. 発表標題 La reconnaissance de Paul Gauguin au Japon a travers les collections
3. 学会等名 La formation et la diffusion des collections d'art francais dans les espaces globaux, 1870-1950 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masaya KOIZUMI
2. 発表標題 La reception de Pierre Bonnard dans les musees francais et japonais
3. 学会等名 日仏美術学会主催国際ワークショップ (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川口茂雄編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 442
3. 書名 現代フランス哲学入門「第一部十九世紀：ゴーガン（小泉順也）」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none">・【報告】ワークショップ報告「ナビ派の2019年」 https://gensha.hit-u.ac.jp/news/detail/event-20191216report.html・【報告】シンポジウム報告「日本の美術館とナビ派 - 地方美術館から考える研究の可能性」 https://gensha.hit-u.ac.jp/news/detail/event-20211213report.html・【報道】「ナビ派」研究の成果披露 美術館学芸員がオンラインシンポ 「静岡新聞夕刊」2021年12月21日
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------